

学生支援組織による聴覚障害学生支援の意義と課題

—愛知教育大学情報保障支援学生団体「てくてく」の事例を通して—

牧 井 直 人 (福井県立南越特別支援学校)
青 柳 まゆみ (愛知教育大学障害児教育講座)
高 橋 岳 之 (愛知教育大学情報教育講座)

要約 本稿では、愛知教育大学における聴覚障害学生支援の中核を担ってきた情報保障支援学生団体てくてくに焦点を当て、組織構成の実態等を整理し、組織運営の課題について検討した。データベースの分析を通して、てくてくの登録者数は年々増えているものの、支援学生の専攻分野に偏りがあり、学年別では3、4年生の割合が少ないことが分かった。また、支援活動の直前に交代の依頼をする学生が相当数存在しており、支援活動に対する意識やマナーの改善の必要性が示唆された。支援活動から離れた学生に対する質問紙調査では、支援離れの理由として、てくてく以外の活動が忙しい、タイピングに自信を持っていない等が挙げられた。以上の結果を踏まえて、大学が提供する障害学生支援に学生組織が関わることの意義と課題について考察した。

キーワード：障害学生支援、聴覚障害、情報保障、支援学生、パソコンテイク

I. 問題と目的

文部科学省(2012)は、大学等が提供する様々な機会において、障害のある学生が障害のない学生と平等に参加できるよう、必要かつ適切な情報保障を行うことが重要であると提言した。また、2016年4月には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」も施行され、各大学等においては、障害学生支援の体制作りや支援内容の充実化が急速に進んでいる。

日本学生支援機構(2016)の調査によれば、2015年5月現在、全国の大学・短期大学および高等専門学校のうち、聴覚・言語障害のある学生に対して授業支援を実施している学校は301校である。情報保障の内容別では、多い順にノートテイク150校(49.8%)、パソコンテイク119校(39.5%)、視聴覚教材への字幕付け73校(24.3%)、手話通訳66校(21.9%)であり、具体的な支援の提供方法は大学によって様々である。

この聴覚障害学生に対する情報保障を、支援学生が担うケースが非常に多い。鳥山(2011)は、障害学生との共学が周りの学生を育てるという視点をもつことの重要性を指摘しており、そのような考え方の下、障害のない学生の成長を期待しつつ日常の支援活動に学生を参加させることは、非常に意義深いことであると言える。しかし一方で、一部の学生への過度な負担や、支援学生と障害学生の間関係の悪化等には十分な配慮が必要であり、加えて、事前に十分な研修を行い支援の質を担保した上で実施することが重要であるとの指摘もある(文部科学省, 2012)。

愛知教育大学には、毎年4～6名ほどの聴覚障害学生が在籍している。実際に行っている情報保障の方法は、パソコンテイク、ノートテイク、手話通訳、視聴覚教材への対応など多岐に渡る。しかし、手話通訳中心の支援は財政面でも支援人材の確保の面でも困難

であるため、二人一組によるパソコンテイクが主な支援方法となっている。

パソコンテイクやノートテイクを担うのは、有志学生の集まりである「情報保障支援学生団体『てくてく』」(以下てくてく)である。てくてくは2007年頃から組織的な活動を開始し、2016年度には230人規模の支援学生組織に成長した。最近では、週に約50コマの講義、週末等に開講される集中講義、大学主催の各種ガイダンスや行事等において、パソコンテイクを中心とした支援活動を行っている。支援を利用する聴覚障害学生も、手話通訳よりパソコンテイクを好む人が多く、てくてくへの期待は常に高い状況である。

しかし、2014年度から2015年度にかけて学生コーディネーター¹を務めた筆者は、てくてくの運営には様々な課題が存在し、その中には、学生だけでは解決できない課題も含まれていると感じている。本稿では、てくてくのメンバー構成、支援学生配置の課題、支援活動から離れていく学生の実態等に着目して、てくてくの運営に関わる課題を明らかにし、てくてくが聴覚障害学生により良い支援に貢献できるための方策を探ることを目的とする。加えて、大学の障害学生支援に学生が参加する場合に必要な、学生と大学との有機的な連携のあり方についても考察する。

注1：てくてくでは、支援学生の配置、新規支援学生の募集・登録、支援技術研修会や練習会の実施など、てくてくの運営と支援活動の実施に係る業務を、学生コーディネーターが担ってきた。2015年4月に大学の支援組織として「なんでも相談室」が開設され、コーディネート業務の一部引継ぎや連携を試みているが、学生コーディネーターの役割に大きな変化はない状況である。

II. 方法

本研究では、以下二つの方法により、課題の検討を行った。

1. コーディネート情報のデータ分析

(1) 分析対象

てくてくに所属する支援学生一人一人の情報を管理し、円滑な支援活動を支えるために、筆者の一人である愛知教育大学情報教育講座の高橋岳之が「講義保障間連絡システム」を開発した。本システムのデータベースには、①聴覚障害学生の授業支援のシフト表、②支援学生の名簿情報、③支援学生の授業支援への出席状況、④メール本文等のデータが蓄積されている。メールには、集中講義など臨時の支援学生募集や学生交流会の連絡、授業支援の交代募集連絡などが含まれる。本研究では、主に②および④のデータを分析した。

(2) 分析対象期間

本システムにデータが保管されている2008年10月～現在のうち、支援学生の名簿情報は2008年10月～2016年9月、メールデータは2010年10月～2015年9月とした。

2. 質問紙調査

(1) 調査対象

てくてくに登録し、最終活動日から1年以上授業支援に参加していない学生30名。

(2) 調査機関および手続き

調査対象者に、2015年11月中旬に質問紙を配布した。回答期限を2015年12月1日とし、それまでに質問紙を回収できた15名分のデータを分析の対象とした。

(3) 調査内容

- ①基礎情報：学年、登録時期、支援を休止した時期、今後の活動予定、手話のスキル（選択式）、タイピングスキル
- ②支援活動から離れようと思った理由
- ③てくてくに対する要望

III. 結果および考察

1. てくてく登録者の概要

(1) 登録者数の推移

2008年度から2016年度における、てくてく登録者総数の推移を図1に示す。

2008年度は43名であった登録者数は年々増加し、2016年度には234名と、発足当初の約6倍に増えた。全ての年において増加が見られるが、2014年度から2016年度にかけては、その変化が特に顕著である。

登録者数が確実に増えている理由としては、支援学生の募集方法の充実が考えられる。てくてくには新規支援学生の募集方法のノウハウが年々蓄積され、学内での知名度も徐々に上がってきた。また、同じ立場で

ある学生が募集活動の中心を担うことにより、募集の意図や支援活動の内容等が分かりやすく伝わり、てくてくの活動に関心を持つ学生が増加していると思われる。

特に2015年度からは説明会の回数を増やし、興味関心を持った学生が説明会に足を運びやすい環境を整えた。そのため、例年にない数の新規メンバーが加わり、総勢200名を超える学生団体となった。こうして、てくてくが従来より抱えていた「支援者不足」という問題は表面上解消された。

しかし、実際に授業支援を行う学生が増えなければ、てくてくは再び「支援学生不足」に陥ってしまう。にも関わらず、特に2015年度は新規登録者に対する支援技術研修の回数が少なく、登録後のフォローアップが十分にできていない。本稿では新規登録学生の研修方法やフォローアップについては言及していないが、新規登録者を十分に活用し、支援活動の実働人数を安定的に確保するための方法については、改めて検討する必要がある。

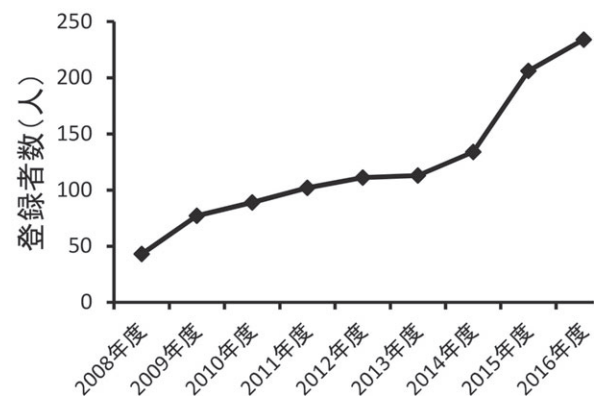


図1 登録者数の推移

(2) てくてく登録者の構成

次に、てくてく登録者の構成の特徴について述べる。

まず、てくてく登録者を専攻分野別に分類し、構成比が比較的大きい分野を中心にまとめた結果を表1に示す。

例年、割合が最も高いのは特別支援学校教員養成課程であり(2014年度52名38.8%, 2015年度52名25.2%, 2016年度55名23.5%), 情報, 国語, 臨床福祉心理, 養護教諭などの分野がこれに続いている。

特別支援学校教員養成課程の全学生数は約100名であるため、毎年およそ半数の学生がてくてくに登録していることになる。特別支援の学生が多い第1の理由は、てくてくの支援を受けている聴覚障害学生のほぼ全てがこの課程に所属していることであろう。つまり、身近に聞こえない学生がいることで、実際に困っている様子を目の当たりにする機会が多く、自分もその人の支援に関わりたいという気持ちが高まると考え

られる。また、カリキュラムとの関連において、聴覚障害についてより深く学びたい、ボランティア活動をしたいという気持ちのある学生が多く含まれていると思われる。

しかし愛知教育大学では、支援学生自身が受講する授業において支援活動を行うことは認められていないため、時間割の違う別の課程・コース等の支援学生の協力も不可欠である。また、特別支援課程に在籍する聴覚障害学生は、語学や各教科の研究法など、他課程・他専攻の授業を多く受講しなければならない。有海ら（2012）が指摘するように、支援対象講義と支援学生の専門性を考慮した通訳者配置を重視するためには、やはり、より多くの専攻から支援学生を発掘し、理想的なコーディネートが可能な状況を作る必要がある。

表1 登録者の専攻分野別人数と構成比
(2014～2016年度)

	2014年度	2015年度	2016年度
特別支援	52 (38.8%)	52 (25.2%)	55 (23.5%)
情報	20 (14.9%)	24 (11.7%)	23 (9.8%)
国語	11 (8.2%)	20 (9.7%)	17 (7.3%)
臨床 福祉心理	9 (6.7%)	15 (7.3%)	15 (6.4%)
養護教諭	4 (3.0%)	12 (5.8%)	21 (9.0%)
教育科学	4 (3.0%)	10 (4.9%)	12 (5.1%)
国際文化	6 (4.5%)	8 (3.9%)	15 (6.4%)
数学	3 (2.2%)	9 (4.4%)	12 (5.1%)
理科	6 (4.5%)	9 (4.7%)	8 (3.4%)
社会	4 (3.0%)	4 (1.9%)	9 (3.8%)
音楽	5 (3.7%)	8 (3.9%)	7 (3.0%)
その他	10 (7.5%)	35 (17.0%)	40 (17.1%)
合計	134	206	234

次に、てくてく登録者を学年別に分類した結果を表2に示す。

例年の大きな特徴は、1、2年生が全体の半数以上を占めていることである（2014年度82名61.2%、2015年度122名59.2%、2016年度121名51.7%）。

しかし、愛知教育大学の授業カリキュラムの傾向として、1、2年生には必修科目が多く、授業支援に参加できる空き時間が少ない。一方、上級生になると自分の授業が少なくなり、授業支援に参加できる時間帯が増える。現在のとてくてくは、3、4年生の割合が1、2年生に比べて少ないが、支援可能な空き時間が比較的多いという点で、上級生の増員も課題の一つであると言える。

表2 登録者の学年別人数と構成比（2014～2016年度）

	2014年度	2015年度	2016年度
1年次	35 (26.1%)	73 (35.4%)	41 (17.5%)
2年次	47 (35.1%)	49 (23.8%)	80 (34.2%)
3年次	24 (17.9%)	52 (25.2%)	59 (25.2%)
4年次	22 (16.4%)	30 (14.6%)	52 (22.2%)
その他	6 (4.5%)	2 (1.0%)	2 (0.9%)
合計	134	206	234

(3) ある特定の一学年における支援活動の変遷

以上は、てくてくの登録メンバー全員を対象に分析したものであるが、中には、登録はしたものの実際の支援活動には参加していない人や、登録自体を辞める人も多数含まれている。そこで、1年次にてくてくに登録した学生がその後の4年間にどのように活動を継続しているかを調べるために、特定の学年に着目して詳細な分析を行った。2012年度の前期にてくてくに登録した学生31名について、その後の活動人数の変化を図2に示す。なお、授業支援のシフトが前期と後期で変わるため、1年間を前期と後期に分けている。

入学当初にてくてくへ登録した31名の学生は、同年後期には継続して活動している人が31名中10名、非活動の学生が21名となった。また、4年次前期の時点では、継続して活動している人はわずか4名、非活動者は19名であり、登録自体を辞めた学生も8名いた。また、学年が上がり再び活動に参加した学生は皆無であった。

多くの学生に登録してもらうことが優先になってしまい、新規登録者が継続して活動していけるような環境を整えられていない可能性がある。なお、この分析

では31名の学生の支援活動の継続の有無しか明らかになっていないが、「支援から離れた理由」については後述する。

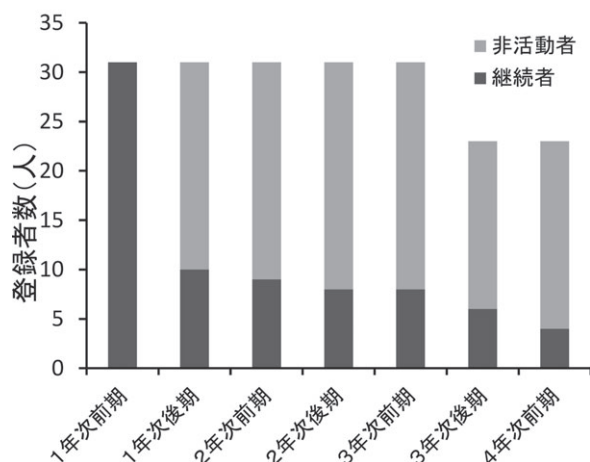


図2 2012年度新規登録者のその後の活動状況

2. 授業支援の交代理由に関する分析

「講義保障間連絡システム」の機能の1つとして、通常のテイクを休む際に支援学生が交代連絡メールを送信できる仕組みがある。そのシステムを使用すると、支援学生全員に「情報保障テイク欠席連絡」という件名のメールが送られる。2010年10月1日から2015年9月30日に送信された全てのメール(計8960件)から、件名に「交代募集メール」と書かれたメール546件を抽出し、その本文の内容を分析した。

(1) 交代募集の総数

2010年10月1日から2015年9月30日の期間に送信された交代募集メール546件を半期ごとに分類した結果を、図3に示す。

まず注目すべき点は、支援学生の配置にはこれだけ多くのキャンセルが発生し、その度に新たな支援者配置の作業が必要となっていることである。実際には、学生コーディネーターの采配により、ほぼ確実に交代の支援者を配置できている。しかし、この交代募集への対応は、学生コーディネーターにとって、少なからず物理的・心理的負担となっている。

聴覚障害学生の在籍数が年によって異なるため、てくてくが支援を行う授業数は多少変動するが、毎年概ね同じである。それに対して交代募集の件数は、2012年後期頃から著しく増え始めている。特に2014年度前期の交代募集数は154件と、過去にない多さであった。なお、2014年度後期52件、2015年度前期37件と減少傾向に転じたのは、当時学生コーディネーターであった筆者が、「交代募集は緊急時にとどめてほしい」と強く伝えたり、支援学生に授業支援の責任感を持ってもらうための企画をしたことの影響が大きいと推測される。

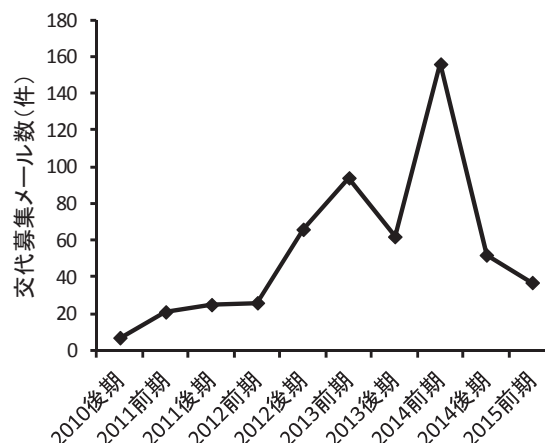


図3 交代募集メール件数の推移

(2) 交代募集メールの送信時期と理由との関連

2014年度(2014年4月1日から2015年3月31日)の期間に送信された交代募集メール208件について、メールの送信時期を「当日」「前日」「2日以前」の3段階に分け、メール送信の時期と交代理由との関連について分析した。交代の理由は、以下の8項目に分類した。

- ①体調不良
- ②通院：定期的な通院、体調不良のための通院等
- ③公共交通機関の遅延
- ④介護等体験
- ⑤スケジュール管理ミス
- ⑥学習系：本人の授業準備、補講、教育実習の事前・事後指導等
- ⑦私用：部活動・サークル、家の用事など
- ⑧記載なし

当日に送信された交代募集メール83件の理由の内訳を図4-1、前日86件の理由の内訳を図4-2、2日以前39件の理由の内訳を図4-3に示す。

まず、交代募集のメールを送信するタイミングとしては、前日または当日が多く、それに比べて2日以前の依頼は少ない。

当日の交代理由として最も多いのは体調不良33件であり、私用26件、学習系10件、公共交通機関5件と続いた。

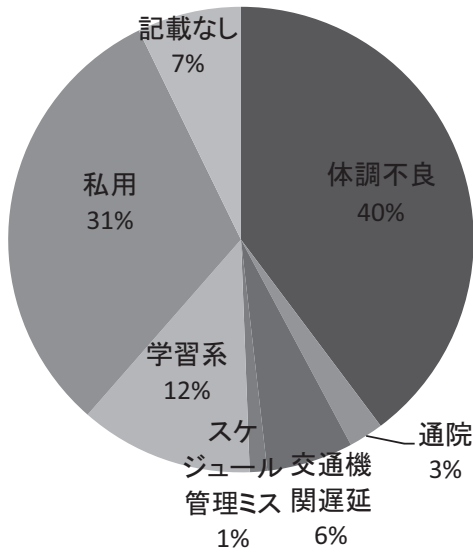


図 4-1 当日の交代理由 (2014年度) ※総数83件

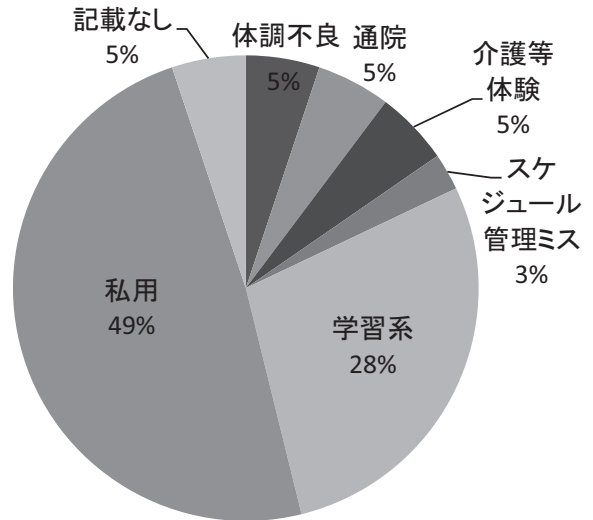


図 4-3 2日以前の交代理由 (2014年度) ※総数39件

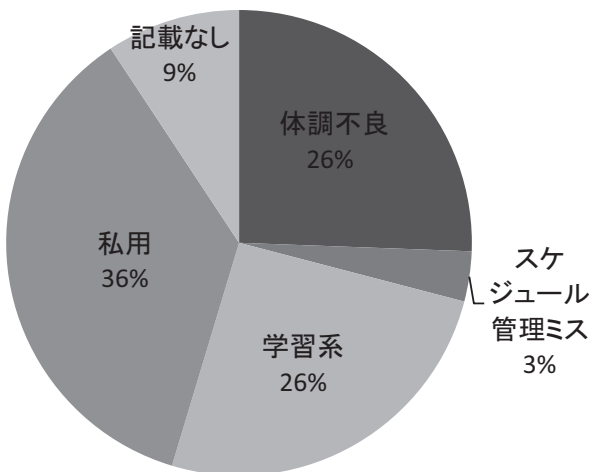


図 4-2 前日の交代理由 (2014年度) ※総数86件

次に、交代募集の時期に関係なく、私用を理由に活動をキャンセルしている学生が多い。「私用のためお休みさせていただきます」のような内容が多く、私用の詳細まで調査することはできなかったが、大学が公式に提供している障害学生支援の一端を担っているという意味で、学生の意識とマナーの改善は今後の課題の一つと言えるだろう。

体調不良はやむを得ない理由であるが、支援の間際まで活動できるかどうか迷い、結局欠席連絡を回している様子が伺える。

(3)「学習系」の理由の詳細分析

2014年度の1年間において、当日又は前日に送信された交代募集の理由は合わせて169件であった。体調不良による欠席はやむを得ないが、学習系の理由が169件中32件であり、予想以上に多く興味深かった。そこで、学習系の理由をさらに細かく分類し分析した結果を図5に示す。なお、学習系の理由の詳細な分類は以下の通りである。

- ①授業の振替、教育実習の事前・事後指導等
- ②本人の授業準備
- ③ゼミ活動
- ④その他

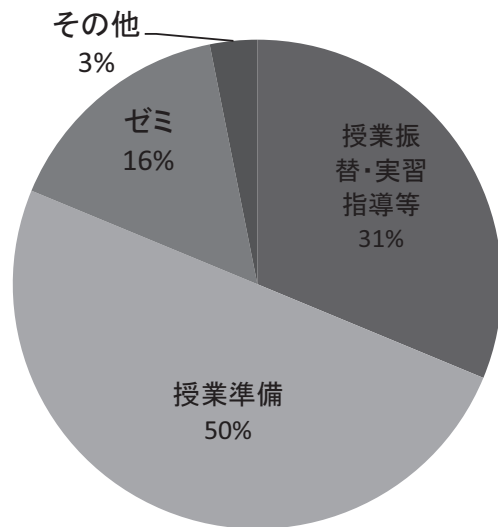


図 5 当日および前日の交代理由における「学習系」の内訳 ※総数32件

「学習系」を理由に交代の依頼をした32件の内訳は、授業準備が16件、授業の振替や実習の事前・事後指導等が10件、ゼミ 5 件、その他 1 件であった。

授業準備が全体の半数を占めているのは、興味深い結果である。授業の直前に発表の準備や予習などを始め、支援活動の優先順位が下がって急遽キャンセルしてしまう学生がいると思われる。しかし、自分の学業を犠牲にしても授業支援を行って欲しいと伝えることは難しい。

一方、授業の振替や実習の事前・事後指導などを理由にキャンセルした学生は、教員から急な変更を告げられ、授業支援を休まざるをえない状況に陥った可能性が考えられる。本人の不注意により欠席の連絡が活動間際になったケースもありうるため一概には言えないが、授業担当の教員には、日程の変更等は出来る限り早めに学生に周知してもらえよう、理解と協力を求めている必要がある。

3. 支援離れの要因に関する質問紙調査

てくてくへの登録は行ったものの、間もなく支援活動に参加しなくなる学生や、最終的に登録自体を辞める学生が多いことを先に述べた。ここでは、支援活動から離れた学生への質問紙調査を行い、その経緯や理由等についてさらに詳しく分析した結果について述べる。なお、調査協力者15名の内訳は、2年生1名、3年生2名、4年生12名であった。

(1) 支援離れの理由について

支援から離れた理由として9個の項目を提示し、各項目に対して「とてもそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「あまり思わない」「全く思わない」のいずれかを選ぶように求めた結果を、表3に示す。

「授業の空き時間がなかったため」に対して「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生が15名中9名、「授業の空き時間はあったが、授業以外の活動(サークル・部活動・委員会等)で忙しくなったため」に対して「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生が7名見られた。自分が受講する授業がおおくて忙しいという理由はやむを得ないが、てくてくの活動よりも他の活動の優先順位が上がり、結果としててくてくの活動から離れた学生もいるようである。仮にてくてくで自分が必要とされていることを実感できなかったのであれば、何らかの対策が必要である。

また、「タイピングに自信がなかったため」という理由に対して「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生が15名中11名と非常に多かった。普段から練習会を開催したり、授業支援でペアとなる人をベテランの学生にしたりしているものの、タイピングスキルに敏感になったり、不安を感じたりしている人はやはり多かった。新規登録学生に対して、タイピングスキ

ルへの不安を和らげるような説明を工夫したり、初心者向けの練習会の内容を充実させたりといった改善が必要である。

表3 支援活動から離れた理由

理 由	とても そう 思う	そう 思う	ど ち ら と も 言 え な い	あ ま り 思 わ な い	全 く 思 わ な い
授業の空き時間がなかったため	5	4	3	1	2
授業以外の活動で忙しくなったため	5	2	3	1	4
支援活動と謝金が割に合わないと思ったため	0	0	2	4	9
通常のテイクが任せられなかったため	0	0	3	1	11
聴覚障害学生とのコミュニケーションに自信がなかったため	1	1	2	4	7
タイピングに自信がなかったため	3	8	2	0	2
パソコンの操作技術に苦手意識を持ったため	1	2	5	4	3
てくてくの雰囲気が悪かったため	0	0	6	7	2
支援活動の中で嫌な思いをしたため	0	0	1	0	14

「謝金が割に合わないと思ったため」という理由に対しては、「あまり思わない」「全く思わない」の回答が15名中13名であり、調査協力者は経済的な理由で支援を辞めたわけではなかった。

同じく「支援活動の中で嫌な思いをしたため」という理由についても、「あまり思わない」「全く思わない」の回答が15名中14名であった。支援活動を離れようと思うほどの嫌な経験はなかったと考えられる。

それに対して、「てくてくの雰囲気が悪かったため」という理由については、「どちらとも言えない」の回答が15名中6名と曖昧な意見が多かった。実際どのような雰囲気が悪かったのかは今回の調査では明らかにできなかったが、注目すべき結果であった。

(2) タイピングに対する自信と実際のタイピング速度との関連

てくてくでは、学生コーディネーターが支援者の配置を決める際の参考資料として、支援学生にタイピン

グスキルの申告を求めている。測定には寿司打²を使用し、支援活動に参加できるかどうかを判断するための目安は、慣例として300文字としている。

注2：回転寿司をモチーフとした、ローマ字入力のタイピング練習ゲーム。流れてきた寿司に表示されている単語をタイプし、寿司を食べていく。タイプミスせずに連打していくと、制限時間が増えるボーナスを受けることができる。てくてくでは、「お勧め」コース（制限時間90秒、文字数5～10文字）の正しく入力したキーの数を、タイピングスキルとして計測している。

URL:<http://typing.sakura.ne.jp/sushida/>

調査協力者のうち、実際のタイピングスキルが300未満の人を「未達成群」、300以上の人を「達成群」として、自分のタイピングスキルに対する自信の程度を分析した結果を図6に示す。

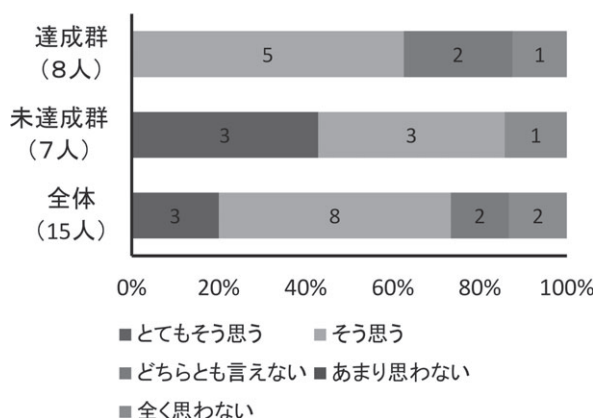


図6 タイピングに対する自信と実際のタイピング速度との関係

「タイピングに自信がなかったため」という理由に対して、未達成群の中で「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生は7名中6名であった。すなわち、未達成群の学生は、自分自身でタイピングスキルを意識し、その不十分さを自覚していることがうかがえる。

一方、達成群の中にも「タイピングに自信がなかったため」という理由に対して「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生が8名中5名いた。学生コーディネーターの立場から見れば授業支援に参加できる基準に達しているにもかかわらず、本人としては自信を持つことができない人がいること、そして、そのことが支援活動から離れる理由の一つになっているという事実は、注目すべき結果である。

IV. まとめと今後の課題

本稿では、愛知教育大学における聴覚障害学生支援の中核を担ってきた情報保障支援学生団体てくてくの組織構成の実態等を整理し、学生コーディネーターによる組織運営の課題について検討した。その結果を踏まえ、大学が提供する障害学生支援に学生組織が関わることの意義と課題について、以下3点を指摘したい。

第一に、支援活動の継続を促す工夫の重要性についてである。

支援学生を学年別に見た結果では、1、2年生に比べて3、4年生の割合が少ない傾向にあった。また、てくてくに登録はしたものの、年々支援活動から離れたり、登録自体を辞めてしまったりする学生が非常に多いことも明らかになった。

学生が短期間ごとに入れ替わり、経験者が不足しているという不安定な体制では、十分な支援活動を展開することは難しい。新規登録者の募集活動も大切であるが、合わせて、登録した学生に対して丁寧な研修とフォローアップを提供し、活動の定着と継続を促す工夫が特に重要である。パソコンテイクには一定のタイピング速度をはじめとした支援技術の習得が求められる。繰り返し研修や練習会に参加し、実際の支援活動も経験する中で、徐々に自信をつけた学生たちがやがて熟達者となり、経験の少ない学生を補いながら支援活動をリードしていくという構図が、安定した支援体制の基礎となる。

次に、支援活動に対する学生の意識の改善についてである。

交代募集の時期と理由に関する分析では、支援活動の間際になって欠席の連絡をする学生が相当数いることがわかった。また、その理由も、「私用」や「授業準備」など、支援活動の優先順位を下げている学生が少なからず存在する。

支援学生間のこうした意識の差をなくし、責任感をもって支援活動に臨むように促すための方法としては、支援学生全員が参加し、支援に関する共通理解を図る機会の確保が有効であると考えられる。

最後に、学生団体と大学との連携の必要性について述べる。

本研究を通して、支援学生の研修方法や意識の統一など、様々な課題が明らかとなった。しかし、学生コーディネーターは日常のコーディネート業務（支援学生の配置）に忙殺されており、スキルアップ研修や交流会等の企画・運営になかなか時間を割くことができない状況にある。加えて、最近では新規の登録者が大幅に増加し、構成員の総数が230名を超えているため、

組織運営に関わる業務はますます忙しくなっている。また、意識の統一に関しても、学生同士という立場では助言できる範囲に限られる。

大学に、障害学生の支援コーディネーターを配置している事例はまだ少数であるが、聴覚障害学生の情報保障に限って言えば、学生が支援の一端を担う場合には、大学職員がコーディネート業務を担当し、指導・助言を行いながら学生の活動をバックアップしているケースが多い（宮城教育大学しょうがい学生支援室、群馬大学障害学生サポートルーム等）。愛知教育大学においても、岩田ら（2013）が指摘しているように、安定した支援を実現させるための機能的な組織の構築が速やかに進められるべきである。そして、大学の支援組織とててくが有機的に結びつき、コーディネート業務を分担することによって、てくてくがこれまで以上に学生団体らしい活気ある活動に従事できる体制が整っていくことを期待したい。

とはいえ、てくてくが学生団体として、今後積極的に果たしていくべき役割も多くある。てくてくには10年以上の活動実績があり、支援のノウハウや新規学生への技術の伝達方法、組織内の交流方法など、先輩から後輩へ引き継がれてきたものが多数蓄積されているためである。学生同士だからこそできる活動が多くあ

る以上、学生の組織性は残しつつ、今後も積極的に支援活動に協力していくことが望ましい。

引用文献

- 有海順子・四日市章（2012）大学講義におけるパソコン通訳の訳出率に及ぼす通訳者要因の影響. 特殊教育学研究,50（4）,353-362.
- 群馬大学 障害学生サポートルーム, <http://syougai.hess.gunma-u.ac.jp/>,2017.1.16閲覧.
- 岩田吉生・高橋岳之・小田侯朗（2013）今, 大学で—聴覚障害学生のサポート—愛知教育大学の巻. 聴覚障害,68（8）,26-27.
- 宮城教育大学しょうがい学生支援室, <http://shienshitu.miyakyo-u.ac.jp>,2017.1.16閲覧.
- 文部科学省（2012）障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）.
- 日本学生支援機構（2016）平成27年度（2015年度）大学, 短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
- 鳥山由子（2011）一般学生の参加の意義. 鳥山由子・竹田一則（編）障害学生支援入門—誰もが輝くキャンパスを—ジヤース教育新社,11-12.